僕の痛セクスアリス

濠門長恭

目次

１．空想／異常性愛の萌芽.....- 3 -
２．相撲／ホモＳＭの洗礼.....- 6 -
３．肉友／最初で最後のホモ達.....- 31 -
４．懲罰／アナル処女喪失
５．調教／輪姦と露出-
６．痴漢／合意の桃色遊戯
７．熱愛／繁殖奴隷と純文ビッチ
８．飼育／ホモ獄舎に志願下宿
９．牝逝／強制連続絶頂
10．放浪／ＳありＭありホモもあり
11．結婚／初心妻調教計画
後書き

１．空想／異常性愛の萌芽

親父が遺したアルバムに、縁側にしゃがんでスイカを食べている幼い僕の写真がある。上半身は裸で、ブリーフがよじれて尻に食い込んでいる。そんなふうにブリーフを絞ると、心地良さとは違う快感があった。肛門への刺激、袋への圧迫を、今もかすかに覚えている。

これが、僕の変態的な性行動の原点だったろうか。

それと、もうひとつ。漫画やドラマに刺激された空想。

僕は悪の秘密結社に捕らわれた少年探偵だったり、悪大臣に誘拐された王子だったり、未来の圧政国家で酷使される奴隷だったりした。少年は柱に縛りつけられて鞭打たれ、逆さ吊りにされて水に浸けられ、磔にされて炎天下に何日も放置された。

漫画やドラマとは違って、空想の中の僕は必ず全裸だった。けれど、性器への拷問やイタズラはされない。漫画やドラマでは、そういう描写がなかったからだ。

そうなると、男性器は邪魔物だった。少年は包皮を内側に巻いてペニスを体内に押し込まれ、その上に袋を接着剤で貼り付けられた。

接着剤は怖いので、駄菓子屋で買ってきた

（裏側に糊の付いた）ワッペン数枚ととセロテープとで実際にやってみて、これでは小便ができないとわかった。風呂場でそのまま漏らしてみて、生温かい感触と「いけないこと」をしているという背徳感とで、胸が妖しくときめいたものだが、それはともかく。

以後の空想では、下腹部に上向きに貼り付けることにした。

空想は就眠前のひとときどころか、授業中でもしょっちゅうだった。

体育の授業で準備体操のとき、体操ズボンの前を膨らませたまま上体を反らして、級友に笑われた記憶もある。

四年生の頃には空想だけにとどまらず、独り遊びもするようになった。

といっても、最初は他愛ないものだった。パジャマズボンの片側に両脚をとおして、後ろにまわした上衣の片袖に両側から手首を突っ込んで何度もねじる。鞭打たれる（打つ）ときは、残念だけれど手の拘束をほどいた。両脚を拘束するとき、腿の間にペニスを挟んでから海老反りすると、ブリーフふんどしで股間を圧迫するよりずっと刺激が強かった。

僕は、遠くの進学校にスクールバスで通っていた。近所の子供とは疎遠で、一緒に遊ぶことも少なかった。もし頻繁に遊んでいれば、ケイドロで縛られたり、お城に忍び込んだく

ノーを捕らえて縛ったりして、正常に（？）育っていたかもしれない。

　しかし、今の僕が僕であるのは、環境のせいではない。ひとつひとつの分岐点で、僕はたしかに自分の意志で道を選んできたと思う。

２．相撲／ホモＳＭの洗礼

最終学年の夏休み。遠くの公園まで、僕は自転車で何度も遊びに行っていた。入口のすぐ奥に、噴水池があった。

当時は〇〇ポルノなんて概念はなかった。どころか、毛が見えていなければ猥褻ではないというのが、社会常識だった。

だから、池で遊んでいる〇〇の半分くらいは、パンツも穿いていなかった。〇歳前の子がほとんどだったが、胸の膨らみかけている少女でさえも、濡れ透けて肌に貼り付いたショーツに、くっきりと縦筋を浮かび上がらせて平然としていた。

僕も、当然のごとくフルチンで池にはいった。水を蹴立てて無邪気に駆けまわりながら、頭の中では九九の暗算や、年号の語呂合わせをしていた。そうしなければ、勃起してしまうからだった。

池で遊んでいる誰よりも、裸は恥ずかしいことだと意識していたのは僕だろう。ほかの〇〇たちは、ここは銭湯と同じように、裸でも恥ずかしくない場所だと思っている。

いや。ひとりだけ例外らしい子がいた。たぶん僕と同学年の女の子。胸が、はっきりと盛り上がっていた。なのに、ショーツすら穿

いていなかった。池の縁石に腰掛けて脚を投げ出し、噴水をぼんやりと眺めていた。
　だらしなく開いた太腿の奥に、ぷっくりと盛り上がった土手が見えた。単純な一本筋ではなく、そこから貝の足のようなものが見えていた。
　僕が近寄っても、その子の表情は弛緩したままだった。養護学級（当時は、そう言っていた）の子かなと、思ったほどだ。けれど、その子の二の腕に鳥肌が立っているのに気づいて、僕は考えをあらためた。
　ほんとうは緊張しているんじゃないか。わざと、恥ずかしい部分を晒け出しているんじゃないか。
　もしも、その子に話しかけていれば、どうなっただろう。僕が思ったとおりの子で、親も友達も一緒じゃなかったとしたら。
　何度か裸のデートを重ねることになったかもしれない。悪家老の僕が、お姫様を縛って拷問にかけたかもしれない。女の子が僕にはなかった知識（赤ちゃんはお母さんのお腹が割れて産まれてくると思っていた）を持っていれば、実践を試みていただろうか。
　けれど現実には、僕は女の子に話しかけるチャンスを失ってしまった。
「足を引きずっているぞ」
　ぱしん。

叱りつける声と乾いた音。
目を上げると。公園の外周を囲むジョギングコースを四人の男の人たちが走っていた。
（え……？）
四人とも、お尻が丸出しだった。〇学生くらいのお兄さんは、細いふんどしだけの裸。お兄さんを囲んでいる三人のおとなは、相撲取りみたいなごついふんどしを締めて、上半身はランニングシャツ。
「もっと膝を蹴り上げて」
ぱしん。
お兄さんの後ろを走っている人が、竹刀でお尻を叩いた。
「はいっ」
お兄さんは、サッカーボールをリフティングするみたいに膝を高く上げて走りだした。
相撲部の特訓だろうか。それにしては、部員が独りきりで先生やコーチが三人というのは、数が逆のような気がした。
僕は池から上がって身体もろくに拭かずに服を着ると、自転車で四人の後を追いかけた。
なぜ、目の前の裸の女の子をうっちゃったのかは覚えてないが、想像はつく。女の子が、僕と同じ恥ずかしいことをしているというのは勝手な推測だ。話しかけて笑われるのはともかく、おとなを呼ばれたりすると困る。
でも。なんだか変なことしているらしい人

たちを後ろから眺めているだけなら、誰にもとがめられないだろう。
四人に気づかれないように、五十メートルくらい離れて、ゆっくりと自転車を漕いだ。
公園を半周くらいすると、お兄さんはひっきりなしに竹刀で叩かれるようになった。お尻だけでなく、太腿や肩も、ばしばし叩かれている。このあたりには遊戯施設も休憩所もなく、暑い盛りにジョギングをする人なんかいない。たまに人に出会うと、とたんにお兄さんは叩かれなくなった。
四人がジョギングコースをそれて、林の中にはいって行った。僕は自転車を道端の樹にチェーンでつないで、細い道に踏み込んだ。
生い茂った草に視界をふさがれたけれど、一本道なので迷いはしなかった。十分ほども歩くと、狭い空き地に出た。プレハブ小屋が建っている。
僕は少年探偵みたいに、こっそりと小屋に近づいて、窓の隅から中の様子をうかがった。
小屋の中は土間になっていた。中央に土俵があった。土は盛っていないけど、俵が円形に埋めてあった。その横で、お兄さんが柔軟体操みたいなことをしていた。
なあんだ。やっぱり相撲部の特訓だったんだ。でも、相撲の稽古なんか見たことがないから、そんなにがっかりはしなかった。

　お兄さんは両側から足首をつかまれて、左右に引っ張られていた。
「痛い……もう無理です」
　お兄さんが訴えても、両側のおとなは力を緩めない。
「まだまだ。若いんだから、身体は柔らかいはずだぞ」
　竹刀を持っている人が、後ろ向きになってお兄さんの肩にお尻を落とした。この人も、ほかの二人も、ふんどし一丁になって、ジョギングのときに履いていた地下足袋も脱いで裸足だった。
「もっと上体を曲げろ」
　土間に突いていた手がずるずるっと前へ滑って、お兄さんの身体は二つ折りになった。
「ケツが浮いては股割にならんだろうが」
　バシン。
　竹刀がお兄さんのお尻の谷間を縦に叩いた。
「痛い……」
　竹刀の人が、お尻の位置をずらして、お兄さんの背中を押さえつけた。
「ぐうう……」
　お兄さんはしばらく呻いていたけど、一分くらいすると苦しそうに言った。
「ごめんなさい。もう赦してください」
「なんだ。もう降参か。根性がないな」
　竹刀の人が立ちあがった。足首を引っ張っ

ていたふたりも手をはなした。
「あとで根性を入れてやるが……まずは、ぶつかり稽古からだ」
　いちばん大きな人が、土俵の上で仁王立ちになった。竹刀の人が、行司の位置についた。
　お兄さんも、一回二回と深呼吸をしてから土俵に上がった。
「お願いします」
　腰を落として土俵に両手を突いて、きちんと仕切ると。頭からぶつかって行った。
　相手の人は、どすんとお腹で受け止めた。
「いいぞ、気合がはいっている。しかし、腰が浮いている」
　お兄さんのふんどしを両手でつかんで軽々と吊り上げた。そのまま土俵際まで運んで下ろしてから。駄目押しのように突き飛ばした。
　お兄さんは尻もちをついたけど、すぐに立ち上がった。
　土俵に戻って仕切り直して。
「お願いします」
　またぶつかって行ったら、ビンタを食らって、べちゃっとはたきつけられた。今度は、すぐに立てない。
「こら、横着をするな」
　竹刀の人が、お兄さんのお尻を叩いた。それでもお兄さんが動かないと、竹刀の先でぐりぐりと肉をえぐった。

お兄さんが立ち上がって、またぶつかって行って、今度は胸を突き飛ばされた。
五回も六回も投げつけられて張り倒されて足払いを掛けられて、ちょっとでも立つのが遅れると、身体のあちこちを竹刀で叩かれる。汗に土がこびり着いて、泥だらけ。
部活って雰囲気じゃない。おとなが二人がかりで、お兄さんを虐めている。あとの一人はカメラを構えて、何枚も写真を撮っている。
お兄さんは、頑張り屋さんなのかな。それとも、さっきみたいに降参しても、今度は赦してもらえないのかな。
不意に肩をつかまれて、心臓がきゅっと縮こまった。
「熱心に見ているな。相撲が好きなのか？」
振り向くと、緑色のジョギングウェアを着た男の人が、僕の顔を覗き込んでいた。
「見ているだけじゃつまらんだろう。ボクもまわしを締めて稽古してみるか？」
「あ、あの……」
返事をする間もなく、プレハブ小屋に押し込まれた。
四人が、いっせいに僕を見た。
「この子も、ちょっと可愛がってやろう」
「やめとけよ。無理強いはまずいぞ……」
カメラの人が、自信なさそうな口調で反対した。

「なあに。素っ裸でチ〇ポを見せびらかしながら水遊びするようなやつだ。相撲ごっこも、きっと気に入るだろう」
　なぜ、この人が知ってるんだろう。そのときは不思議だった。
　相撲の稽古に見せかけていても、ふんどし一本の少年をおとなが寄ってたかって竹刀で追い回していれば、いつ通報されてもおかしくはない。念のために見張り役がずっと後ろを走っていた――なんてことまでは、当時の僕は思いつかない。
「ボクくらいの歳になってフルチンで水遊びをしてたら、おうちの人や学校の先生に叱られるんじゃいかな。高山秋雄クン？」
　自転車に書いてある名前を読まれたんだ。自転車には住所も書いてある。言うことを聞かなければ告げ口するぞと、脅されているんだ。
「相撲ごっこ……します」
　パニクっていた僕は、そう答えるしかなかった。
「それじゃ、俺が替わろう。ただし、食べるときは、仲間はずれにするなよ」
　お兄さんを投げ飛ばしていた人が、ふんどしをはずして普通の服に着替えると、小屋から出て行った。
　ジョギングウェアの人が裸になって、カメ

ラの人に手伝ってもらいながら相撲のまわしを締める。
「困ったな。ボクに合うサイズのまわしがない」
　竹刀の人が、にやにやしながら言う。
「そうだ、ヒロシ。おまえのふんどしを貸してやれ」
　お兄さんが、きょとんとした。
「替えは持ってきてません」
「おまえが締めているやつを貸してやれ。どうせ、おまえはアナル四股だ」
　お兄さんが複雑な表情になった。怯えたような、そのくせ何かを期待してるような。僕もそうだったから、よくわかる。
　お兄さんがするするっとふんどしをほどいた――布の端は、細く絞って腰に巻いた部分に絡めていただけだった。
　お父さんの（ふだんの）チ〇ポは見慣れているから、おとなの人はまわりに毛が生えてて、頭のところが剥けてることは知っていた。
　お兄さんは、まだ毛が生えてなくて、頭の先っぽも半分くらい皮をかぶっていた。でも、お腹に接着剤で貼り付けられたみたいになっていて、お父さんの（ふだんの）よりも大きいくらいだった。
　お兄さんが後ろに立って、僕の肩に布を掛けた。幅は二十センチくらい。布は汗で湿っ

て、おとなの臭いがしていた。
　僕のチ〇ポは縮こまっていた。それが上から下へ包まれて、細く絞った布がお尻から引き上げられた。腰をぐるっとひと巻して、お尻から斜めに伸びている部分で折り返して、まっすぐになるまで引き絞られた。余った布は腰に何重にも絡めつけられる。まだ肩に掛かっていた側も、同じように股間を包んで、さっきとは反対方向に絞られた。
　ブリーフでふんどしの真似をしたときとはまるで違う圧迫感だった。心も体も引き締まる感じ。ふんどしを締めてかかるという表現が、すとんと腑に落ちた。
「転がりの練習くらいはさせたいが……まあ、いいか。ボクも面白くないだろうしな」
　僕は竹刀の人に腕をつかまれて、土俵に引きずり入れられた。
「手加減して投げてやる。全力でぶつかっておいで」
　カメラの人とジョギングウェアだった人はお兄さんを……ええっ？
　お兄さんは四つん這いになって、お尻の穴にバットの根元を突っ込まれているところだった。幼児向けの玩具だけど、それでもグリップの直径は四センチくらいあるだろう。お兄さんは、大きく口を開けて、苦しそうに喘いでいる。

グリップの細い部分まで埋め込まれて、お兄さんが立ち上がった。グリップエンドが中でつっかえて、バットは抜け落ちずに、膝の下までまっすぐに垂れている。そして、お兄さんのチ〇ポはバットみたいに太く硬くなって、バットとは反対に天を向いている。
お兄さんが両脚を開いて腰を落とすと、バットの先が地面についた。
「よーし、始め！」
お兄さんが四股を踏んだ。片足を上げるとバットが地面から離れて。ぺちんと足を落とすとバットの先が地面に当たるだけじゃなくて、太くなっている部分まで、お兄さんのお尻の中にぐうっとめり込む。
「ぎいい……」
歯を食いしばって、お兄さんが呻く。でも、チ〇ポは縮こまってない。
あ、そうなんだ。僕は、不意に納得した。お兄さんはおとなの人たちに虐められてるんじゃなくて、虐めてもらってるんだ。納得すると同時に、僕の独り遊びなんて、おままごと以下だったんだと恥ずかしくなった。
「よそ見してるんじゃない。掛かってこい」
叱られて、僕は相手に向きなおった。
「お願いします」
お兄さんの真似をして。きちんと仕切ると、ふんどしがお尻の穴に食い込んで、気持ちい

いとは思わなかったけど、いつまでもそうしていたかった。
　けれど、すぐに地面を蹴って相手にぶつかっていった。
　どすんと相手のお腹に頭突きをして、頭がくらくらした。
　そして、相手の顔が目の前にあった。そこまで吊り上げられたんだと気づいたときには、くるんと相手の顔が不意に消えて、地面が目の前にあった。
　僕は土俵に叩きつけられた。正確にいうと、ふんどしと二の腕をつかまれて上下逆さにされて、落ちるよりはゆっくりと下ろされた。肩が土俵に当たったときは、そんなに痛くなかった。
「そら、もう一丁こい」
　十回くらい、おとなの人が言う相撲ごっこをさせられた。僕もお兄さんと同じように、全身汗と泥にまみれていた。
「よーし、今日はこれで赦してやる」
　僕に掛けられた言葉じゃなかった。
　お兄さんが、最後に四股を踏んだ姿勢のまま、前に倒れた。お尻を突き出して、バットが斜め上を向いている。
　ぐぽん。
　バットが抜き取られたとき、大きなおならみたいな音がした。

　カメラの人が、自分のまわしをほどき始めた。
「アナルは厭だ。すごく痛いんだ」
　お兄さんが立ち上がって、小屋の隅へ逃げた。両手で前を隠して、しゃがみ込む。
「なあに、バットよりは細いから大丈夫だ」
　ジョギングウェアの人が笑いながら近づいて、お兄さんの手首をつかんだ。
「厭だ！　本気で抵抗するよ！」
　お兄さんは相手の腕を振りほどこうともがくけど、噛みついたり蹴飛ばしたりはしない。
「そっちがその気なら……」
　フルチンになったカメラの人が、壁際に置いてある鞄の中から縄を取り出した。
　二人がかりでお兄さんの腕を背中にねじ上げて、手首を縛った。だけじゃなくて、二の腕もろとも胴体も縛った。首に別の縄を巻いて、胸を巻いている縄に絡めながら下ろしていって、袋の付け根を縛って、縄の先を後ろへ引っ張って――あっという間にお兄さんは、肩と膝を地面につけてお尻を高く突き出した形にされた。
　縛られているあいだ、お兄さんは抵抗しなかったし、厭だとも言わなかった。
　縛られたくて、わざと逆らったんだと、僕にはわかった。
「ボクは、ああいうのにも興味があるのか？」

竹刀の人が背中から覆いかぶさってきた。左腕で僕の抵抗を封じるように抱きしめて、右手がふんどしの上からチ〇ポをつまんだ。びっくりしたけど、何をされるか怖かったけど。独り遊びをしてるときに感じる、エッチな気分の塊りみたいなものが、胸の奥に広がった。

薄い布越しにつままれて、きゅっきゅっとしごかれた。

「あっ……やめて」

突然、おしっこをしたくなった。何かが、チ〇ポの中を突き抜ける感覚。

「あ、ああっ……！」

びくびくっと、腰が跳ねた。でも、それだけだった。くてっと、全身から力が抜けた。

「いっちょまえに出すかと思ったが、空砲か」

ぴしっと指で弾かれて。今度は痛いだけだった。

急に、相撲ごっこへの興味が失せた。

でも、お兄さんがカメラの人にされている、僕の目には究極のエッチな虐めに見える行為には、純粋な好奇心が残っていた。

カメラの人がお兄さんの腰をつかんで中腰になって、チ〇ポをお兄さんのお尻の穴に突っ込んでいる。そして、腰をお兄さんのお尻に打ちつけるみたいに激しく前後に動かしている。

「はっ、はっ、はっ……」
　チ〇ポを突き挿れられるたびに、お兄さんが喘いでいる。お兄さんのチ〇ポは、反りかえってお腹に押しつけられている。そして。
「や、やだっ……そこ、やめて！」
　それまでより甲高い、女の子みたいな声で叫ぶと。ピュピュッと白い液が噴水みたいな勢いでほとばしった。
　僕は何も出なかったけど、もっと成長するとああなるんだと、本能的に悟った。
　カメラの人も、お兄さんのお尻の中に白い液を出したんだろう。ふうっと深呼吸をしてから立ち上がると、お兄さんよりもずっと太くて長いチ〇ポの先からしずくが垂れていた。ところどころが茶色に汚れている。お尻の穴に突っ込んだんだもの、うんちが付くよね。
「おら。ひとりで満足してるんじゃないぞ」
　ジョギングウェアだった人が、お兄さんをあお向けに転がした。折りたたまれて縛られた両脚を左右に押し開いて、その間へ腰を入れた。
（あれ……？）
　そのポーズには、見覚えがあった。本屋でおとなが立ち読みしていた雑誌の漫画で、男の人と女の人とが、そんなふうに（女の人は縛られていなくて）抱き合っていた。
　この瞬間。エッチに関係した断片的な知識

が、間違った形でひとつにまとまった。お尻の穴はお腹の中につながっているんだから、やっぱり赤ちゃんはお母さんのお腹が割れて産まれてくるんだ。
　ジョギングウェアだった人がお兄さんを虐めるのを見ているうちに、また僕のチ〇ポが硬くしこってきた。
「興味津々だな。ボクも、ヒロシみたいにアナルセックスをしてみるか？」
　ぶるぶるっと、僕は首を横に振った。お兄さんでも、あんなに苦しんでる。身体の小さい僕だったら、お尻の穴が裂けてしまう。
「怖いか。無理に犯したりはしないが……覗き見を無罪放免ともいかないぞ」
　肩を強く押さえられて、僕は土俵に膝を突いた。
　半立ちになった僕の前に、竹刀の人が立ちはだかった。ゆっくりとまわしをほどくと、この人のチ〇ポも太く硬くなって真上を向いていた。それを右手で押し下げて、僕の鼻先に突きつけた。
　おしっこのアンモニア臭ではなくて、おとなの腋の下やお兄さんのふんどしと似た、粘っこい臭いがした。
「咥えろ」
　そんな物を口に入れるなんて、考えたこともなかった。

おしっこの出るところなんて汚い――とは、なぜか思わなかった。すごくエッチなことなんだと、それだけを理解していた。
僕は素直に口を開けて、顔を前に突き出した。
ぐぼっと――口いっぱいにチ〇ポがあふれた。年少さんの頃に魚肉ソーセージを丸かじりして、喉に詰まらせた記憶が甦った。チ〇ポのほうがずっと硬くて弾力があるけれど。
「チ〇コの先にエラが張ってるところ、わかるね。唇を歯にかぶせて、エラの後ろをあむあむしなさい」
声が、ぐっと優しくなった。
言われたとおりにすると、竹刀の人はぶるっと腰を震わせた。巨大魚肉ソーセージが喉の奥を突いて、僕は息を詰まらせた。
「じょうずだぞ。チ〇コの裏側に硬い筋が縦に浮いてるのがわかるか？　舌でれろれろしなさい」
また喉を突かれるのはいやだったので、おでこをお腹にくっつけて、両手で竹刀の人の腰をかかえた。第三者の目には、抱きついてチ〇ポをむさぼっているように見えただろう。
言われるままに舌を動かし、鈴口を舌先で突っついたりもした。ちょっぴりしょっぱかった。
「つらいかもしらんが、ちょっとのあいだ辛

抱しなさい」
　声と同時に、両手で頭をつかまれた。
「苦しくても、歯を立てるなよ」
　頭を激しく前後に揺すられた。と同時に、竹刀の人も僕の頭と反対方向に腰を動かし始めた。
　喉の奥を何度もチ〇ポで突かれて、歯の裏側をエラでこすられた。
「ん、んんんんっ……」
　吐きそうになったけど、ここで口をはなしたら叱られると悟っていた。
　チ〇ポの毛で鼻をくすぐられてクシャミが出そうになったけど、それも我慢した。
「出すぞ。息を止めていなさい」
　ぐうっとチ〇ポが膨らんだ感じ。と同時に、びくびくっと震えて。喉の奥に熱い液が叩きつけられた。
「んぐぐぐ……」
　むせそうになって、でも頭をつかまれていて逃げられないので、僕はその液を飲み下した。水よりもずっと粘っこくて喉に絡んだ。
「ほう、いきなりゴックンか。ボクは素質があるぞ」
　半分はからかってるみたいな声だけど、半分はほんとうに感心してるみたいだった。
　竹刀の人が後ろに下がって。僕は地面に両手をついてへたり込んだ。まだ頭がぐらぐら

していて、喉の奥がいがらっぽかった。また吐き気が込み上げてきたけど、せっかく褒められたんだから、我慢した。
　パシャッ……パシャッ……
　カメラのシャッターの音。ずっと撮影されていたのかもしれない。顔を隠すということを僕は知らなかったし、知っていても手遅れだった。
　竹刀の人がポロシャツと半ズボンに着替えた。
「ジャンボを呼んでくるわ」
　小屋から出て行った。
　カメラの人が、鞄からまた縄を取り出した。
「せっかくだ。ボクにも緊縛を体験させてあげよう」
　縛られて、お兄さんみたいにお尻の穴をチ〇ポで虐められる――そう思ったけど、絶対に厭というほどじゃなくなっていた。お兄さんはバットのグリップでもはいった。それよりもすこし細いおとなチ〇ポなら、僕でも大丈夫かもしれない。チ〇ポを咥えさせられて白い液を飲んで、僕はエッチの階段を上がった気分になっていた。
　僕の両手が背中にねじ上げられた。手首に縄が巻かれただけで、胸が苦しくなった。チ〇ポが硬くなっていく。
「なるほど。素質たっぷりだね」

ふんどしの上からチ〇ポをきゅっきゅっとしごかれて、ますます硬くなる。
胸に縄がまわされて腋の下で絞られると、息はちゃんと出来るのに、ますます胸が苦しくなった。苦しいんじゃなくて、エッチな気分の塊りなんだと思い当った。
僕は立たされて、ふんどしをほどかれた。ずきんずきんと、今にも破裂しそうなくらいにチ〇ポが脈打っている。
そこから先の縛られ方は、お兄さんとは違っていた。
腰に二つ折りの縄が巻かれて前で結ばれた。縄が袋を左右から挟んで、下で結び目が何個も作られた。そうして後ろへ引き上げられると、結び目のひとつがお尻の穴に嵌り込んだ。
「あ……」
声を出したのは、すこし痛いけれど気持ちよかったからだ。
気持ちよいというのとも、ちょっと違う。物差しで自分の腿を叩いたときと同じ感じ。叩いた箇所が気持ちいいんじゃなくて、頭が痺れたようになる。
そして、安心したというか残念というか。お尻の穴をふさがれたんだから、チ〇ポとかバットを突っ込まれることはないだろう。
腰の上で結ばれた縄がお尻を横に割って前に戻されて。縦に走っている縄を引き広げた。

縄でふんどしをされて、でも肝心の部分は菱形に開かれている。フルチンの百倍は恥ずかしい。
　カメラの人は、その恥ずかしいところを別の細い二本の紐で隠してくれた――んじゃなくて、もっと恥ずかしくしてくれた。端を菱形の左右に結ぶと、二本をクロスさせながら反対の縄に渡して折り返す。それを何度も繰り返して、僕のチ〇ポは荒い網目で包まれた。勃起したまま、お腹に磔にされた。
　玉もボンレスハムみたいにされて、これはほんとうに痛くてつらかった。でも、エッチな気分の塊りは胸の奥でますます膨らんで、頭も靄がかかったように痺れている。
　パシャ……パシャ。
　また写真を撮られたけど、後ろ向きになって恥ずかしいところを隠そうとはしなかった。堂々とカメラに向かって……
「おいおい。ちっとは恥ずかしそうにしてくれよ」
　変な注文をつけられた。
　両脚を閉じて身体をねじって顔をそむけたり、女の子みたいに横座りになって顔をうつむけたり――言われたとおりのポーズをとった。網目に花を挿されたりもした。茎の先がチ〇ポに当たって、くすぐったいけど、エッチな気分がますます盛り上がった。

そして、大柄な人が戻ってきて。僕は縛られたまま、その人のチ〇ポを咥えさせられた。
チ〇ポを咥えて口をすぼめたまま息を吸い込んで唇を震わせるとか、玉を舐めるとか、チ〇ポの中に残っている白い液を吸い出すとか、いろんなことを教わった。
教わっているあいだ、足の裏でぐりぐりされたり、足の指でつねられたり、僕のチ〇ポはずっと虐められていた。可愛がられていたのかな？
ごっくんするものだという間違った知識をすでに刷り込まれていたから、また吐きそうになるのを我慢して白い液を飲み込んだ。漂白剤の臭いがするとか、ちょっとしょっぱいけど基本的には味がないとか、いろんなことに気づいた。
「飲んでくれたご褒美だ」
そう言って縄のふんどしをほどくと、大柄な人は僕をあお向けに寝かせると、足の裏でさっきよりも激しくチ〇ポをぐりぐりと踏みにじった。男の子同士でやる「電気あんま」をうんと激しくした感じ。
僕は、あっさりと空砲を打たされた。すると、途端に。胸の奥のエッチな塊りが消え失せて、頭の痺れも治ってしまった。早くほどいてほしい、もう赦してほしい。それしか考えられなくなった。

おとなたちも僕の変化に気づいたのか、自分たちが満足したからなのか。縄をほどいて、タオルを貸してくれた。
身体の汚れを拭いて、許しが出たので服も着た。
ヒロシと呼ばれたお兄さんは、別の形に縛りなおされていた。身体を二つに折って、左右別々に手首と足首をまとめて縛られて――お尻に、またバットを突き刺されていた。その格好で、壁に沿って歩かされる。つんのめって転びかけると、バットをつかんで引き戻される。
「来週と再来週も、木曜日は午後一時から夕方まで稽古をしている。またおいで」
僕は小屋から追い出された。もしかすると、撲には刺激の強過ぎる、もっと凄いことをするのかもしれない。でも、それを見てみたい気持ちにはならなかった。
僕は黙ったまま、ぺこんとお辞儀をして小屋から逃げ出した。ジョギングコースに戻ると、ぶらぶら歩きながら煙草を吸っている大柄の人がいた。僕を見ても知らん顔。なので、僕も知らん顔で自転車に乗って、来た道を引き返した。
――その夜は、堪能し尽くしていたというか。空想よりも凄いことが現実に起きて圧倒されていたというか。なかなか寝付けなくて、

羊を五百匹以上は数えた。
　それから二週間、僕は空想に耽らなくなった。頭にあるのは、つぎの木曜日にどうするかということだった。あそこへ行って。お兄さんと同じように扱ってくださいとお願いする自分を考えて、チ〇ポを硬くした。
　でも、怖かった。やっぱり、お子様メニューでいいや。だけど、おとなの人たちがそれで満足してくれるかな。ここまで来たからには覚悟ができてるな――とか。
　そうして。次の木曜日は、迷いに迷って。宿題に専念した。
　その次の木曜日には自転車に乗って公園へ向かったけど、十五分も走ると怖くなって引き返した。
　三度目の正直は、なかった。何度も引き返しかけては自分を励まして。プレハブ小屋まで行ったけれど、誰もいなかった
　こうして、僕の幼い体験は尻切れトンボに終わった。
　空想癖は甦ったけれど、シナリオは激変していた。進学先で相撲部にはいって、先輩たちに厳しい稽古をつけてもらって。態度が悪いと難癖をつけられて、縛られて反省会。もちろん最後は、お尻と口に先輩の根性を注入してもらう。
　当時は女子プロレスが人気だったので、そ

れも別シリーズに追加した。まだデビューできない年齢の女の子が、特別練習生として練習させてもらう。全裸でブリッジをして、あちこちくすぐられたり悪戯されてブリッジを崩したらお仕置きというシチュエーションは、自分で創作したのか、やはり漫画あたりから仕込んだのかは覚えていない。女にはチ〇ポがないので、お尻と口に根性を注入するのは男性コーチの役目だった。

３．肉友／最初で最後のホモ達

実は女性にしかない器官を使うのが正しいセックスだということは、二学期の終わりに同級の女子から教わった。男子が数人で声高に間違った性知識を吹聴していると。
「あんたたち、馬鹿ね。オマ〇コを知らないの？」
ふだんは地味で目立たなかった森聡美が、腰に手を当てて男子たちの前に立ちはだかり、そう言い放ったのだ。
その一件で彼女の株は上がったんだか下がったんだか。男子からはサド美様と奉られるようになった。噂では、オマ〇コとはどういうものか実物を見せてもらったやつもいたとかいないとか。
――僕の独り遊びも、夏休みの経験に刺激されて、進化していた。
〇学校に上がってからは、自分の下着は自分で洗うと宣言して（それはそれで、親にあれこれと想像させたらしいが）部屋に洗濯ロープを張った。洗濯バサミも大小取り揃えた。小遣いを貯めて、頑丈なバックルの付いた幅広のジーンズベルトを買ったりもした。
図工の授業で買った糸ノコは、もう壊れていたけど、グリップだけは抽斗にしまってあ

った。太いところでも直径は三センチとなかったから、そんなに痛くはなかった。
　八月に両親が会社の慰安旅行に行った夜、糸ノコのグリップを肛門に突っ込んで、チ〇ポを太腿に挟んで自縛しているとき、精通を経験した。空砲を打つより、ずっと快感が強かった。そして、直後の虚脱も深かった。
　夏休みの始めに例の公園へも行ってみた。プレハブ小屋はつる草に覆われていて、土俵も取り払われていた。
　僕がさらにエッチの階段を上がるには、一年を待たなければならなかった。

　二年生になった最初に、転校生が来た。清水昌文という、僕よりも華奢で、僕よりもハンサム度が劣っている子だった。
　あ。〇学校時代は、女子のあいだで僕は評判になっていた。
「わりとイケてるのよね。スカートめくりさえなかったら」
　僕は自分の性癖が他人とは異なっていると自覚していた。それを級友に知られないためにも、ふつうの男子がするエッチな悪戯を人一倍熱心に実践していた――のかというと、そうでもなかった。ふつうにエッチなことにも、大いに興味があった。ただ、当時の僕はとても純真（？）だった。まず特定の女の子

と仲良くなって、二人だけでスカートめくりよりもエッチなことをしてみようなどという下心がなかったのだ。
　それはともかくとして。
　僕は科学部の幽霊部員だったけれど、清水はすぐに熱心な読書部（帰宅部）員になった。
　五月の連休が終わってすぐの頃だった。
　体育の授業の前。数学でわからないところがあって先生に教わっていたので、教室に戻ったときには清水しか残っていなかった。ほかの男子は、さっさと着替えて校庭で遊んでいる。
　清水は僕に気づいて、体操ズボンを穿きかけていた手を一瞬止めた。
（あれ……？）
　清水の尻が丸見えになっていて、僕は彼がパンツを穿いていないのかと思った。白い細い紐が尻のあいだに見えたが、ふんどしにしても細すぎた。
　彼は慌てて体操ズボンをずり上げると、逃げるように教室を出て行った。
　そういえば。彼は皆がいなくなってから着替えて、体育のあとは真っ先に教室へ戻っていた。ふつうとは違う下着を見られないように用心しているのかもしれない。
　体育が終わると、僕は彼と競い合うように教室へ駆け戻った。彼はものすごい速さで着

替えたけれど、股間に白い三角の布が貼り付いているのが見えた。
　僕よりもエッチなやつかもしれない。そう思った。相撲ごっこでふんどしの締め方を覚えて、捨てられていたカーテンを細く裂いて独り遊びで使っていたし、それを締めて外出したこともあるけれど。体育のある日まで奇妙な下着を穿いてくるなんて、すごい度胸だ。
　放課後。僕は下足口のところで、清水をつかまえた。
「なんだか……変な下着を穿いてたね？」
　清水は怯えた目で僕を見たが、何かを感じ取ったのだろう。表情が妖しく動いた。
「興味あるの？」
「うん……」
「見せてあげようか？」
　清水は廊下へ引き返した。僕は十メートルくらい離れてついて行き、彼がトイレにはいると三十秒くらい待ってからはいった。トイレには、ほかに人がいなかった。彼は一番奥の個室で、扉を開けたままにしている。
　僕も後ろを気にしながら同じ個室にはいって、後ろ手に鍵を掛けた。
　清水は上衣をたくし上げ、ズボンをずり下げた。
　ちらっと目撃したとおりだった。小さな逆三角形の布が股間を包み、それぞれの頂点か

ら細い紐が伸びていた。ふんどしよりも、ずっとエッチだった。
「着けてみる？」
　耳元でささやかれて、僕は反射的にうなずいていた。
　清水はズボンを脱ぐと、逆三角形の布を足首から引き抜いた。それを掌に乗せて、僕に見せる。
　三角形の頂点から伸びている紐は一本きりで、対辺は端が袋状に縫われていて、その中を紐が通っていた。
　僕は、ちろちろと清水の股間にも目を走らせていた。半勃ちになっていることを割り引いても、ペニスは僕よりもすこし大きい。そのほかは真逆だった。僕はそれなりに発毛していたけれど、彼はまったくの無毛だった。そのくせ、勃起したときしか剥けない僕と違って亀頭が完全に露出していた。
　彼が、僕のズボンに手をかけた。意図を察して、僕もズボンを脱ぎブリーフも脱いだ。学校で大便をするとからかわれるので、個室を使う生徒はほとんどいない。だから床は綺麗で、ズボンが汚れる心配はなかった。
　清水は紐を対辺から抜かずに大きな輪を作った。それを僕の片脚に通しかけて、ふっと手を止めた。
　ペニスからＣの形をしたリングを抜き取っ

た。すると、半分くらい包皮が亀頭にかぶさった。
　清水が僕の皮を剥いて、カリクビにリングを嵌めた。包皮がせき止められて亀頭が完全に露出した。
　あらためて、清水が僕にふんどしをあてがった。対辺から出ている紐を腰にまわして、尻を斜めに横切っている紐に絡めて引っ張ると、尻の谷間に紐が食い込んだ。布の位置を合わせて形を整えて、T字形になった紐を十分に引き締めてから、端を腰の紐に巻きつけていくのは、六尺ふんどしと同じ。
　六尺ふんどしと違って布は一重だし、淫毛がはみ出るくらいに小さい。六尺ふんどしは昔の実用品だが、これはエッチ専用のふんどしに思えた。
　リングで剥き出しにされた亀頭に布がこすれて、硬くはなるけれど勃起はふんどしで押さえ込まれている。それでも射精しそうになって、必死で我慢する。
　そういったすべてを清水はお見通しなのだろう。くくっと笑って、また耳元でささやいた。
「下着を交換しようか？」
　ブリーフを彼に手渡したのが、僕の返事だった。
「矯正リングだけは、あとで返してね」

通販を利用するのは親バレの危険があるから、何度も利用はしづらい。それに、こういったグッズは値段が高いのだそうだ。
個室は、入るよりも出るほうが難しい。耳を澄ませて気配をうかがって。僕が先に出て、出入り口まで行って人が来ないのをたしかめてから、エヘンと咳払い。
トイレから出ると、お互いに知らん顔で下校した。
家に帰って三角ふんどし（黒猫ふんどしというのだと、後日彼に教わった）は、我慢汁の大きな染みが出来ていた。
こうして、僕と清水昌文とのホモ・セクシュアルな関係が始まった。

親にもクラスメートにも知られたくない関係だけど、学校では知らんぷりできるほど二人とも自制心があるわけでもなかったし、二人きりになれる場所もそうはなかった。昼休みに図書室の隅でこっそりペニスを手でしごき合ったり、放課後に体育倉庫であわただしくフェラチオをしたり。
体育倉庫には、煙草とマッチを隠しておいた。二人でいるところを見つけられたら、隠れて煙草を吸おうとしているところだったと言い訳するためだ。チ〇ポを咥えているよりは煙草を咥えていたほうが、処分は重いかも

知れないが名誉は守られる。
　彼はふだんから無口だったから、僕からしつこく尋ねないかぎりは自分のことを話してくれなかった。もっとも、訊かなくてもわかることは、たくさんある。ときおり、黒猫ふんどしの布地からびっしりとイガのようなごく短い毛が突き出ているのを見て、彼は無毛なのではなく剃っているのだと知った。そのときには、相撲ごっこでしごかれていたヒロシさんを思い出していた。たぶん、彼も剃ったか剃られたかしたんだろう。
　C形の包茎矯正リングを、昌文は装着しなくなった。あれを嵌めたまま亀頭を刺激されると痛いからだそうだ。つまり、僕にさわられるのを期待していたということ。
　変態的なふんどしを常に着用しているくらいだから僕よりも進んでいるんだと思っていたが、そうでもなかった。亀頭の先端同士を押し付け合う兜合わせは彼から教わったが、フェラチオは僕が教えた。する方もされる方も、彼はそれなりに積極的だった。
　キスは、幼稚園時代のおままごとを別にすれば、僕も彼も初めてだった。おとなのキスは舌を挿れるくらいは知っていたし、ペニスへの刺激技も実践していたから、じきに濃厚なディープキスを交わすようになった。
　けれど彼は、アヌスは触れるのも触れられ

るのも嫌がった。演技ではなく、本気で抵抗した。
　それと縄。どんなに頼んでも、昌文は僕を縛ってくれなかった。縛られることも、彼は好まなかった。
「誰かが来たとき、すぐにほどけない」
　それは口実だと、僕にはわかっていた。無理強いに手首を縛ってみたことも何度かあったが、彼のペニスは縮こまったままだった。
　基本的に、彼はＳもＭも好まず、ただ同性と性愛関係を持ちたい欲求だけがあったのだろう。それにしてはアナルセックスを拒む心理がわからないが。
　もしかすると、彼は女性になりたかったのかもしれない。坊主頭は強制ではなく、ほとんどの生徒は（僕も）長髪にしていたが、彼は長髪というよりロングヘアーだった。
　女性化願望が高じて、自分に女性器がないことが悔しくて、それをアヌスで代用するのが厭だったのかもしれない。もちろん、そういったことを彼の口から聞いたことはない。僕の勝手な憶測だ。